HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	小特集序文 ： 地域が耕すサイエンス～北のまちから始まる持続可能な未来への挑戦～
Author(s)	西尾, 直樹
Citation	科学技術コミュニケーション, 25, 63-64
Issue Date	2019-07
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/75054
Type	editorial
File Information	06_jobun.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

小　特　集
北海道大学 CoSTEP シンポジウム
地域が耕すサイエンス
～北のまちから始まる持続可能な未来への挑戦～

1. はじめに

2019 年 3 月 9 日，CoSTEP では「地域が耕すサイエンス」と題し，科学と地域の関りにフォーカスを当てたシンポジウムを開催した．CoSTEP の Web サイトには，CoSTEP の役割が明記されており，その記述の中に「科学技術コミュニケーターは，科学技術の専門家と一般市民との間で，社会的諸課題について双方向的なコミュニケーションを確立し」「地域のさまざまな組織と連携をとり，地域に根ざした科学技術コミュニケーションの活性化に貢献します」と明記されており，地域と科学は，科学技術コミュニケーションにおいて，もともと密接な関係を持つトピックである．

2. 科学と地域，二つのアプローチ

地域と科学の関わりの形には，いろいろなパターンがあるが，今回は【科学→地域】【地域→科学】のベクトルの方向で 2 つに分類した．まず【科学→地域】，こちらは科学の応用先の「現場としての」地域である．いわゆる「シーズ」オリエンテッド，シーズ志向と呼ばれたりもする連携の在り方である．ただ，この連携はそう簡単にいくものではなく，「科学の知見を活用するための地域」というだけでは地域側のニーズと合わず，うまくいかない場合がある．そのため科学を応用するためには，現地の人たちと長く信頼関係を築きながら徐々に地域に科学を浸透させていくということが重要になってくる．

もう一つ，こちらが今回のメインの視点となる【地域→科学】の視点である．これは社会の最先端が生まれる現場としての地域，というアプローチである．現在の社会は，温暖化やエネルギーの問題，人工知能の普及，人口減少・高齢化など，非常に複雑で緊急な課題を抱えている．さらに，それらの諸課題は順番にではなく一度に訪れる．このような現代的な課題に対しては，これまでのアプローチではうまくいかないということが往々にして出てきている．そのため，地域の現場から生み出される最先端の情報を基に生まれる新しい知見を活用し，これからの持続可能な社会のモデルを作っていく必要が出てきた．この【地域→科学】は，これからの未来社会のヒントが非常に多く地域に隠されているのではないかという視点である．

3. 3 人の「サイエンティスト」と地域の事例に学ぶ

サイエンスの語源の一つだと考えられている，ラテン語の「scientia」は知ることという意味を持つ．何かを知るという行為は，決して研究室の中だけに留まる行為ではない．顕微鏡から飛び出し，書籍からこぼれ落ちた「サイエンス」が世界には溢れている．そう，「サイエンス」は地域の中にも．これからの産業，持続可能な生活，危機に折れないまちづくり，地域の中での試行錯誤から新しい「サイエンス」が生まれているのである．

このシンポジウムでは，3 人の「サイエンティスト」をお呼びした．一人目は，美深町と連携してチョウザメの陸上養殖の産業化に取り組んでいる北海道大学教授の都木さん．二人目は，林学を林業に実装化するために，厚真町に飛び込んだ厚真町役場の宮さん．そして三人目は，環境と暮ら

しという観点から地域行政に取り組む下川町議員の奈須さん．それぞれの立場から，データを検討し，システムを開発し，そして実践を批判的に分析しながら，新しい知を生み出している．地域で耕される「サイエンス」，このシンポジウムではその「耕し方」について，参加者と一緒に考える時間となった．

科学の知見と地域の現場の力との融合の中に，これからの時代のヒントや希望を感じていただけたら幸いである．

文責：西尾直樹（科学技術コミュニケーション編集委員）